

ラトビア学生大使の報告書

学籍番号 15515026

工学部情報科学科 1年 加藤 将

本プログラムは山形大学が提携する各大学での日本語教室を通じて、各国との文化交流や自身の英語能力の向上をはかるものである。自分は英語能力の向上とともに今後のグローバル社会に向け欧州文化に触れることを目的としてこのプログラムに参加した。内容はラトビアのラトビア大学に 2/24～3/25 である。

ラトビアは人口 200 万ほどのバルト海に面した北欧の国である。建物等は旧ソ連の面影を残したものが多く、人口の 3 割近くはロシア人である。人口 70 万を擁するリガはバルト海に面する港湾都市で、西側の旧市街がリガ歴史地区として世界遺産に登録されている。数百棟に及ぶ歴史的建築物はハンザ同盟時代の中世ドイツ的な面影がのこる。また、たくさんの博物館や美術館があり、そのどれにも歴史的価値の高い展示物がある。バルト最大の都市と言われ、スウェーデン王国では最大、ロシア帝国では第三の規模を誇る都市であり、歴史的な重要度は極めて高い。

ラトビア大学はラトビア最大の大学で、本館は旧市街と新市街の間に位置している。今回授業を行った経済学部は比較的駅に近い旧市街に存在し、本館同様歴史的な大理石の建造物である。また国際学生寮はリガの南部に位置し、学生の方曰く、その周辺はあまり治安が良くないとのこと。被害には遭わなかったが、深夜早朝、特に女性は注意が必要だろう。

日本語教室は毎週月～金の 4:30～6:00 と 6:30～8:00 で、それぞれ上級と初級のどちらかである。教室の鍵は日本人側がおおむね 4:00 くらいに守衛から借り、部屋を開けておく。守衛の方は英語が通じなかったため、現地学生にラトビア語に訳してもらったフレーズを毎回見せるようにしていた。授業に来る方でラトビア大生はむしろ少なく、中学生から社会人まで様々であった。途中参加や途中帰宅も多く、授業は最初から聞いていなければ分からないような構成にしないように注意しなければならなかった。初級の方はとにかく日本語を理解しようと、上級の方は日本語をうまく喋ろうと努力している印象を受けた。そのため初級は語彙を扱いながら日本語をパズル形式で文法解説、上級は漢字の意味や慣用句、助詞等の内容を説明することが最も適切であると思われた。上級になると日本人が答えられないような質問（概ね文法に関する）も多く、半ば感覚論で答える場面もあった。また、カルタや書道等の文化紹介は非常に人気が高かったが、あくまで日本語の習得にきているのであまり多くやっても問題があった。適度に織り交ぜていくのが良いだろう。人数は多いときは十数人、少ないときは 1 人であった。初級は概ね 6 人くらいと多く、上級は日によってまちまちだったが初級よりは少なかった。たまに山大生でない他校の留学生

も訪れたりして、総合的に日本語の交流場のような役割があった。

学生寮は先述の通りであり、駅から出る 15 番バスで大学周辺まで出る必要がある。値段は 2€、回数券が 2~20 回まであり 20 回だとだいたい 20€となる。二部屋でバスルームとトイレを共有するシステムで、1フロアでキッチンルームを共有する。概ね金曜から日曜は宴会が始まるのでとてもうるさい。



このプログラムに参加して感じたことは日本語を教えることの難しさである。英語圏での生活はさほど大変ではなかったが、日本語の文法等は詳しく習ったことも無いので説明が出来なかったのだ。これは、日本語を教えるという名目で学生を送っている以上、ある程度基本的なことは教えておくべきだと思う。これは

副詞でこれは形容動詞がついてというように教えると大変喜ばれたので、特に品詞については予め知っておくべきである。

今回英語能力の向上と欧州文化に触れることを目的として参加したが、自分はまだまだ井の中の蛙であることを知らされた。欧州の文化は日本とまるで違うことが多い。物の売り方、住居の様式、マナー、常識までもが時に違うのである。特に日本では間違いであることが正しいとき等は思い切って朱に交わって赤くなる必要がある。英語は向こうの方もネイティブでは無いので若干聞き取りにくいところもある。もちろん日本人などよりよほど話せることの方が多いが。しかしだいたい何を言ってるか分かるようになったり、何が言いたいか分かってもらえる（例えば文法の説明で）ようになってきたときは成長を感じることが出来た。

しかし欧州の文化はまだまだ奥が深いのであろうことは実感できたし、英語だって中途半端なままで完全とは言いがたい。だから今回の経験を生かしてよりこれらの目標を深めていきたいと思う。

